

九州大学新中央図書館建設の経緯  
Administrative Aspects in the Course of Construction of  
the New Central Library of Kyushu University

長尾公司  
*Koji Nagao*

*Résumé*

Kyushu University has completed a new central library building in the main campus in order to accommodate more books and periodicals, to serve rapidly increasing number of students, to cope effectively with change in composition of the campus, and to satisfy demands of users who had long been complaining of old and inflexible library facilities and services.

Because of the sensitive nature of the problems such as a proposed building site and a proposed new library system, negotiations at an opening stage had to be planned and conducted with care, endurance, and insight.

This is a report of how library directors and staff members overcame administrative difficulties to attain planned objectives.

The new library building was completed on November 10th, 1972, along with the old one that was reshaped to function as a deposit library of the University.

The University architect was rewarded a 1973 "Shisetsu-geppo sho", a prize given for an excellent national educational building in Japan.

The building data are as follows:

Term of works: December 28th, 1971 to November 10th, 1972.

Architect: Building office, Kyushu University, Fukuoka.

Adviser on library functions: Koji Nagao, Tohoku University Library, Sendai.

Number of persons to be served: 5,500 students and 1,000 researchers.

Area: 8,060 square meters (86,670 square feet) with two tiers stack areas. Approximately 2,200 square meters (23,660 feet) on each of the three floors, lower floor being on ground level.

Stack capacity: 500,000 volumes in stack areas and 50,000 volumes in reading areas.

Seating capacity: 721 seats, including 47 carrels.

長尾公司: 東北大学附属図書館整理課長。前九州大学附属図書館整理課長  
Koji Nagao, Chief, Technical Services Division, Tohoku University Library; formerly Chief, Administration and Technical Services Division, Kyushu University Library.

## 九州大学新中央図書館建設の経緯

### はじめに

- I. 九州大学附属図書館の沿革
- II. 新中央図書館建設
- III. 新中央図書館建設計画の新展開
- IV. 具体的準備作業の開始
- V. 各学部における関心の変化
- VI. 保存図書館の実現
- VII. 竣工、移転そして開館
- VIII. 新中央図書館の設計概要
- IX. 九州大学の将来構想と図書館

### おわりに

### はじめに

九州大学の新中央図書館は、1971年12月28日に着工し、翌1972年11月10日に延8,059.73平方メートルの全館を完成したが、筆者は、たまたま1969年4月1日から1973年3月31日まで九州大学附属図書館整理課長の職にあり、図書館側の責任者として、管理と技術の両面からこの新築計画に参画し、完成後の整備・移転計画の立案・実施に携わり、1973年3月6日の正式開館を見届けることができた。筆者としては、このような大規模な大学図書館建築に関与できたことは、図書館員としての得難い経験であり、建設の経緯について何らかの記録を残すことは、自らの反省のためにも、他への参考のためにも、意義があると考え、東北大学に帰任した現在も、なお、気掛かりな一事であった。今回の報告によって、その責任の一端でも果たすことになれば幸いである。

#### I. 九州大学附属図書館の沿革

九州大学附属図書館は、1922年に九州帝国大学附属図書館として設置された。大学の歴史は、さらに古く、1903年に京都帝国大学の1分科大学として、現在の福岡市東区堅粕に設置された福岡医科大学を母体として、1911年に医科・工科の2分科大学を擁した九州帝国大学が創設されたときにさかのぼる。1919年には官制改正により医・工・農の3学部をもつ総合大学となり、1924年に法文学部が新設されたが、その建物が、すでに工・農両学部が占めていた現在の福岡市東区箱崎に新築される

のに並行して、隣接敷地に鉄筋コンクリート造2階建の図書館本館と4階建の書庫とが完成したことにより、箱崎地区において学習図書館機能を果たす中央図書館としての体裁が一応整えられたが、一方において、法文学部に密着した図書館運営のながい慣行も、ここにはじまった。成長期の大学として当然のことながら、この建物も、数年をでないうちに利用スペースと収蔵スペースとの不足が明らかになり、1930年に事務室部分を増築したものの、利用部分と事務室部分との間に書庫が位置し、2つの部分の連絡を断つような配置となったため、その後一切の増改築がないまま、かえって機能的に欠陥の多い建物になってしまった。

1939年に理学部の新設があり、キャンパスは、次第に北側に伸びて行くことになった。1949年に法文学部が文・法・経済の3学部に分離し、新設の教育学部とともに、1963年に浜地区に新築されたそれぞれの学部が図書室と書庫とを持つ建物に移動し、その跡に応用力学・生産科学の2附置研究所が位置するにおよんで、箱崎地区における全学生のための学習図書館と、文科系4学部と理学部との図書整理センターとしての中央図書館の機能が、このようにキャンパスの南隅に取り残されては、十分に働かなくなることは明らかであった。

#### II. 新中央図書館建設の気運

大学の発展に伴って図書館の収書量が増大し、利用者人口が膨張するのは、当然のことである。九州大学においても例外ではなく、50年前に建築された古い中央図書館は、そうした量的な問題に対応できないだけでなく、

質的にも、レファレンス・サービスや相互利用などの新しい図書館機能の容器としてもすでに不適當であり、歴代図書館長にとって、図書館近代化の命題と新中央図書館の実現とは、分離して考えることのできない懸案であった。

1963年から1966年にかけて文部省において大学図書館施設研究会議が開かれた時期は、全国的にも、大学図書館行政と建築についての改善意欲が盛り上がった一時期でもあった。この会議の委員の1人であった北川敏男館長は、会議での自身の主張を九州大学においてどのように具体的にすることについてきわめて熱心であったが、1963年に附属図書館商議委員会に次の「九州大学図書館行政基本要綱」を提案し、承認を受け、九州大学図書館行政改善計画委員会を商議委員で構成し、発足させた。

#### 九州大学図書館行政基本要綱（全文）

##### 第1要綱（研究）

大学の1つの使命は、学問の研究にあるから、その図書館においては、専門図書・貴重図書の収集および保存について遺憾のないよう努め、また文献情報の活動を盛んにして、学界の進歩に敏速適確に応じなければならない。

##### 第2要綱（教育）

大学の1つの使命は、学生の教育にあるから、その図書館の行政においては、教育資料としての教養図書・指定図書の確保について適当な措置を行い、またその運営規則において学生のため充分な便宜を図らなければならない。

##### 第3要綱（公共性および交流性）

大学の図書は、研究および教育のため公共性を持つから、その健全な保管に充分な考慮を払うとともに、学内において広く利用されるものとしなければならない。また学外に対しても、相互利用の道を開き、学術交流に役立つべきである。

##### 第4要綱（総合性）

中央図書館および部局図書館（室）の分担する任務は、明確にすべきであるが、総合大学の実を上げるために、これら図書館（室）の相互利用を充分円滑に行い、その運営規則は、互恵的にして、能率的な利用通路を確立しなければならない。

##### 第5要綱（改善）

大学の図書館の運営においては、その伝統的な事情を尊重するとともに、常に時代の進歩に適応した行政体

制を確立して行かなければならない。

また、図書館行政改善計画委員会は、5つの小委員会から成り、次のように審議事項を分担した。

第1小委員会：九州大学図書共通利用準則について

第2小委員会：予算制度検討について

第3小委員会：図書整理改善と蔵書構成検討について

第4小委員会：文献情報および図書館活動改善について

第5小委員会：新館建築計画について

これらの小委員会における審議の結果は、商議委員会に報告あるいは提案のかたちで寄せられたが、全体的な結論は、新中央図書館、いわゆる新館の建設を志向することとなり、旧館利用をも含んだ新館建設計画の基本方針は、さきの基本要綱に則るべきものであるということから、図書館行政改善計画委員会は、第1（人文・社会科学系）、第2（自然科学系）の2つの小委員会から成る九州大学図書館体制委員会に改組された。各小委員会の分担審議事項は、

第1小委員会：

1. 関係4学部図書運営規則の改善案作成
2. 九州大学図書共通利用準則（案）の設定に伴う具体的措置原案作成
3. 新館建築に関する諸計画の具体的検討および要望調査

第2小委員会：

1. 図書館運営規則の改善について原案作成
2. （第1小委員会と同じ）
3. 旧館利用に関する具体的計画の立案

であった。この分担に見る考え方の相違点をさらに分析すれば、浜地区に移動した後も、全面的に整理業務を中央図書館に依存している文科系4学部、目録業務のみ依存している理学部、全く依存していない農学部、農学部と同じではあるが、旧館に関心の強い工学部、さらに、キャンパスが異なり、分館が置かれている教養部、複合分館である医学分館のサービス圏に入っている医・歯・薬3学部と、それぞれの学部の条件や関心が異っているわけで、さきの基本要綱の第5要綱にいう“伝統的な事情”の重さや、第4要綱にいう“総合性”実現の困難さが明らかになってくるのである。

このような経過をたどっている間にも、事務的には、文部省に対して毎年概算要求手続を通して新館建設の意志表示をしている必要があったのであるが、建設位置に

## 九州大学新中央図書館建設の経緯

ついでに学内調整は、図書館側の意の如くとり運ばなかった。すでに箱崎地区では、各学部とも建物が混みはじめており、自らの拡張余地の確保の方により関心があり、浜地区の文科系学部も、無条件で図書館に用地を割愛できるほどの余裕はなかったが、結局は、文科系学部にある書庫に接続して、それをとり込んだ中央図書館を新築するという仮案で要求を続けることになり、次の「九州大学附属図書館新館計画趣意書」が商議委員会で認められ、具体的検討は、新たに組織された図書館建築計画委員会に委ねられた。

### 九州大学附属図書館新館計画趣意書（全文）

#### 1. 基本構想

1) 文・育・法・経4学部の建物に接続して中央図書館を新築する。(以下これを新館という。)

2) 新館ならびに現有館をもって九州大学附属図書館とする。

3) 九州大学図書行政に関しては、九州大学図書行政改善5要綱を基本理念とし、改善計画委員会報告ならびに図書館体制委員会審議の結果に基づき、近代的な大学図書館運営の確立を目的とする。

#### 2. 新館建築

基本5要綱のうち、第1乃至第3要綱に関しては、次の計画をもつ。

##### 1) 第1要綱（研究）

a) 学術情報センターの設置：完備した目録室を設け、学内・外の図書館資料の検索に役立たせること、参考図書室を拡充すること、整理事務との関連を有機的にすること、参考業務の確立を図ること、などを目的とする。

b) 文献情報検索及統計機室：文献検索の機械化を図ること。図書行政運営のため、統計面の整備を図ることを目的とする。

c) 古文書部の設置：特別の施設をおき、貴重図書の保管および古文書の整理に当たることは、大学図書館の重要な任務である。

d) 複写センターの設置：研究面における複写の利用の質的向上、量的増加にかんがみ、十分の規模をもつ複写センターの設置が必要である。これにより、図書館資料の利用度を高めることを目的とする。

##### 2) 第2要綱（教育）

e) 指定図書室：新制大学の教育体制においては、指定図書利用は、顕著な意義を持つものである。九大での昭和37年以来的実績にかんがみ、所要規模

の指定図書室を計画した。

f) 個席及個室：学部学生とくに大学院学生のためには、個席の用意が必要である。また、特定目標の研究をおこなうとき、個室の用意も、大学院博士コース学生には必要である。これにより、図書館利用が高度化する。

g) 視聴覚資料室：図書館資料は、図書・雑誌に限るものでなく、学術資料としてのレコード、フィルム等を置き、教官および学生の文化活動に広く利用させる。また、諸研究、諸調査の成果が各研究室に分散、死蔵されている在来の実情に対比するとき、このセンターの利用度は大きい。

h) 資料展示室：各種の学術研究資料を展示する。その展示内容は、年度計画に従って変更し、多方面の学術資料への接近を可能にする。

##### 3) 第3要綱（公共性および交流性）

i) 諸学術資料センターの設置：新築計画において、次の諸資料センターの設置を計画する。これにより学内・外の利用の便を図る。

イ. 統計資料センター

ロ. 外国法資料センター

ハ. 東南アジア資料センター

ニ. 教科書資料センター

ホ. 関連資料センター

なお、これらの資料を利用して研究の便を図り、演習室および個室を設置する。

j) 目録及び複写センターの充実：既述のことであるが、図書館資料利用の公共性および交流性に役立つことは、当然である。

#### 3. 現有館利用方針

現有館の位置は、大学構内の一角に偏しているが、その周辺は、工学部諸教室ならびに諸研究所に取り囲まれ、工学部教官ならびに学生にとっては、新館に比し著しく便利な地理的位置にある。理・農の順にこの便利の程度は、低下する。これらの事情にかんがみ、現有館利用の基本方針は、次のようにしたい。

##### 1) 全学的な保存書庫の設置

理(4万6千冊)、工(15万冊)、農(14万8千冊)、医(15万3千冊)のうち、これら理科系学部では、その約3分の1である計15万冊程度をここに移し、保存書庫として管理する。

##### 2) 理工科系指定図書室の設置

##### 3) 自然科学系研究資料室の設置

第1表 九州大学中央図書館資格面積 1970年5月1日現在

区	分	学生数および蔵書冊数	必要面積 (m <sup>2</sup> )	有効健全面積 (m <sup>2</sup> )	資格面積 (m <sup>2</sup> )				
箱崎地区	(理工系) 旧本館 農学部書庫	学部学生数 2,320人 大学院学生数 1,435人 蔵書冊数 751千冊	9,014	3,994	5,020				
浜地区	(文科系) 文科系書庫	学部学生数 1,260人 大学院学生数 464人 蔵書冊数 558千冊	6,163	3,124	3,039				
計			15,177	7,118	8,059				
国立学校建物の実態調査等に用いる必要面積一覧表・昭和44年度用 (現行基準) 抜粋、									
区	分	必要面積は、 ( 当該団地の 学部学生数 (a) " 大学院学生数 (b) " 蔵書冊数 (A) …単位 千冊 ) による							
図	箱	$1a + 2b + 5.3(A \times 1.5 - 0.1a - 0.16b) + 300$ (全学で1館に限り、更に300m <sup>2</sup> を加算することができる。) (カック内が負数となる場合は0とする。)							
箱	崎	$a$ $b$ $A$ $a$ $b$ (九州大学の場合) $1 \times 2,320 + 2 \times 1,435 + 5.3(751 \times 1.5 - 0.1 \times 2,320 - 0.16 \times 1,435) + 300 = 9,014$ $1 \times 1,260 + 2 \times 464 + 5.3(558 \times 1.5 - 0.1 \times 1,260 - 0.16 \times 464) + 300 + 300 = 6,163$							
浜	地区	中央図書館	工学部	農学部	応用力学研	産業労働研	生産科学研	事務局	計
		学部学生数 大学院学生数 蔵書冊数	470 270 74,025	1,420 859 214,405	430 306 187,496		14,837	5,379	2,320 1,435 749,551
		文学部	教育学部	法学部	経済学部				計
		学部学生数 大学院学生数 蔵書冊数	70 74 38,944	480 135 150,688	440 101 114,346				1,260 464 557,480

## 九州大学新中央図書館建設の経緯

4. 九大図書行政の基本方針は、諸施設の設置により第3要綱の具体的実現を図ると共に、第4および第5要綱の確立にまたねばならない。これに関しては、次の計画が進められている。

- 1) 九大部局図書共同利用準則の設定
- 2) 九大部局図書室規則の改善
- 3) 九大部局図書行政改善委員会の設置
- 4) 九大ドキュメンテーション委員会の設置

### 5. 新館建築上の要望

#### 1) 冷暖房装置

新館の書庫は、諸学術資料センターの設置に伴い、常に全学的に利用され、かつ塩風の被害を防ぐためにも、温度・湿度を調整する冷暖房装置が是非必要である。

#### 2) エレベーター

a) 高層建築であるから一般用エレベーターが必要である。

b) 書庫内に図書業務用エレベーターが必要である。

以上の趣意書に盛り込まれたうち「2. 新館建築」の諸要素についての具体的かつ詳細なデータは、1965年2月までに、タイプ印刷110ページの「九州大学中央図書館新築計画参考資料」としてまとめられたが、これは、当時、文部省において続行中であった大学図書館施設研究会議での成果に大きな期待をかけた内容であったので、1966年3月に公表された同会議の答申である「大学図書館施設計画要項」<sup>1)</sup>の線と、現行基準とされている国立学校の実態調査等に用いる必要面積一覧表(第1表参照)に示された数字とをどのように調整するのかについては、全く触れられていない。そして、「大学図書館施設計画要項」に示された大学図書館の機能のあるべき姿を九州大学の事情に当てはめた「中央図書館の役割について」が商議委員会において承認された。その内容は、次のとおりである。

### 中央図書館の役割について(抜粋)

1. 大学図書館の役割および機能と問題点(略)
2. 中央図書館の役割
  - 1) 役割  
中央図書館は、学習・総合・保存図書館の諸機能を全体として有機的、一元的に果たすべきものである。以下、それぞれの図書館の諸機能について述べる。
    - a) 学習図書館

学習図書館は、全学の学部学生の学習と教養の場としての役割を果たすために、教育目的に直結した奉仕活動をおこなうことは、大学図書館の存在理由からいって当然のことである。とくに、指定図書制度の採用、開架方式の採用、参考図書の整備、図書館利用の指導等を積極的におこなう。

#### b) 総合図書館

総合図書館は、大学図書館活動の総合的管理および連絡調整をおこなうべき任務をもつものであるが、とくに、その奉仕活動として取り上げなければならないことは、次の諸点である。

イ. 全学の総合目録を完備することによって、全学図書館資料を有機的に結びつけ、効率的な利用を図る。

ロ. 総合的な情報管理をおこない、当該大学以外の図書館との相互協力のため、情報センターを設けて、積極的な活動をおこなう。

ハ. 近代的大学図書館の任務として図書館利用者に提供する複写サービスは、不可欠の要件であるので、完備した複写センターの施設を設ける。

ニ. 一般的な参考文献を完備すると共に、参考司書を配置して教官および学生の質問・相談に応じる参考部門の拡充・強化をおこなう。

#### c) 保存図書館

図書館は、絶えず生長する有機体(growing organism)とされているが、利用ひん度の相対的に低下した図書館資料は、迅速・的確な奉仕活動のためにも、集約的に収納されなければならない。これらの資料を全学的に収納する保存図書館の管理・運営は、中央図書館の任務である。

### 2) 問題点

上記の中央図書館の役割を円滑におこなうためには、教官の中央図書館に対する協力は勿論であるが、問題点としては、有能職員の適正確保と図書館職員の資質向上が取り上げられなければならない。とくに、奉仕活動に重点が置かれている問題があるが——これについては、いろいろ検討すべき問題があるが——図書館職員に、書誌の活動に必要な技術、高度な語学力および全学問分野に対する専門的知識を研修させ、養成することが強く要請される。

### 3. 今後の本学における中央図書館の役割

第70回商議委員会(41.5.27)において、学習・総合・保存図書館としての中央図書館の役割が決定、承認

された。このために重点的に取り上げられなければならないことは、全学図書館（室）との連絡調整、全学総合目録の早期整備、参考業務および総合的情報管理の強化などである。

（以下略）

#### 4. 中央図書館の現状（職員数との関連）

（略）

#### 5. 結論

（略）

これまで述べてきたような周到かつ精力的な北川館長の努力にもかかわらず、新館建築の見込みは、なかなか立たなかった。そして、伊藤不二男館長に代ったのちも、図書館側の努力は続けられたが、やがて九州大学も、他大学同様に大学紛争の渦中に入り、目まぐるしく変化する学内情勢のため、図書館においても、商議委員会などの諸会議の日程さえ組めない状態が続き、新館についての論議が不活発になって行くままに、新館建築計画委員会もまた活動を休止し、いわゆる北川構想実現の可能性は、完全に遠のいたかに見えた。

### III. 新中央図書館建設計画の新展開

1969年7月1日から同年8月10日までの間、中央図書館が一部学生に占拠されると言う事件が起った。これは、図書館が学生の抗議や要求の直接対象となったためではなく、箱崎・浜両地区のキャンパス占拠の一環として学生が取った行動と見做されたのであるが、閲覧業務が再開されるまでの約4ヶ月間は、一般学生は、キャンパス内に学習の場を失うことになった。勿論、再開は急がねばならず、その要望も強かったが、建物内の破壊が皆無であったにもかかわらず、図書館側としては、あえて拙速を避け、本来ならば7月中に着工していた筈の閲覧室の冷暖房工事にまず入り、これと並行してレファレンス・ルームの整備とカウンター配置の合理化とを主目的とした大幅な館内の模様変えを実施する方策を取った。

この事件は、結果において学生の図書館への関心呼びさますことになり、図書館側が取った、機能を新たにして再開する方策は、学生には予想外のことだけに、長い休館についての不満を打ち消すほどに好評をもって迎えられた。しかし、改善は絶対的なスペース不足の解消にまで及んだわけではなく、再開後学生の入館数が急増し、利用が活発化して行くにつれて、遠い浜地区から来る文科系学生が良い席を得られないという状態も目立ちはじめた。

一方、浜地区の文科系4学部では、学生が研究室備付図書の開放利用と閲覧スペースの確保について要求し、例えば文学部では、現行の研究室制度を図書館方式に改めるという学部改革案が真剣に検討されるなどの動きもあったが、結局文科系4学部は、さきの「新館計画趣意書」中の“文・育・法・経4学部の建物に接続して、中央図書館を新築する。”という、当の4学部が仮案として諒解した事項をむしろ、既定方針であるとして、その早期実現を図書館側に要望して来た。これは、学生の要求を図書館の方にかわしたと受け取れなくもないが、これらの新しい動きによって、新館建築問題は、ようやく大学紛争も収拾のきざしを見せはじめた学内の議論の場に再び上される足掛かりをつかむことになった。

大学紛争のさなかに広報委員長をも務めた伊藤館長が過労から病床につかれたあとをうけて、1970年2月に就任した高木暢哉館長は、就任と同時にこの新しい動きをとらえて、精力的に学内の根まわしをはじめた。そして図書館内部でも、技術的検討を再開した結果、

1. 文科系4学部へ接続して建築する仮案では、建物の高層化は避けられず、また既設の建物に動線が制約されて、自由な平面計画ができない。

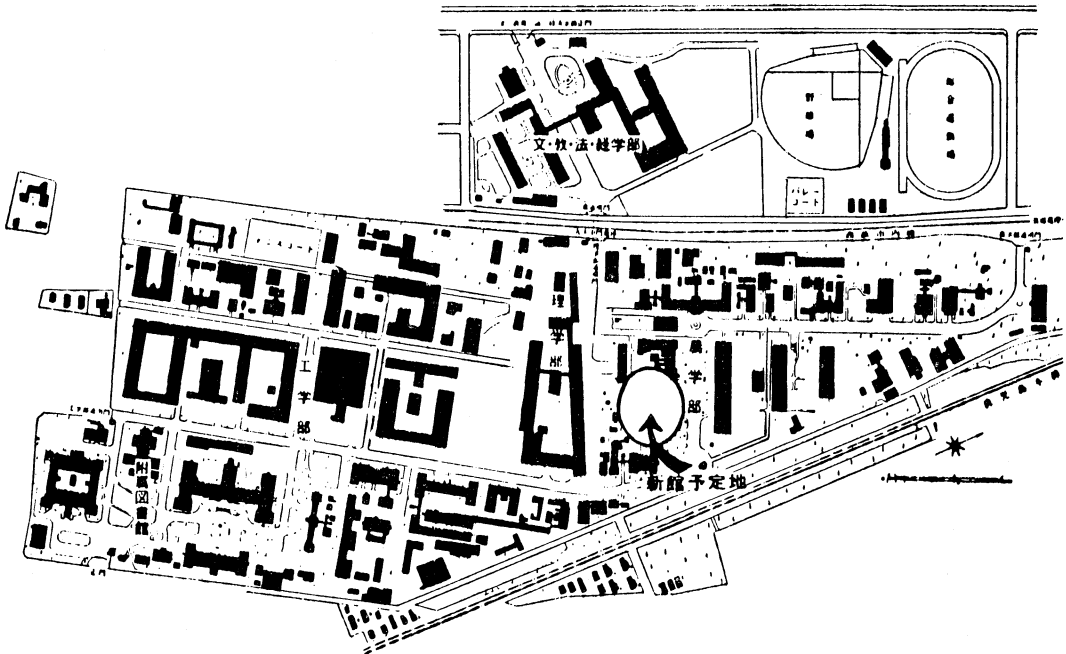
2. 将来の図書館機能の拡大と蔵書数の増加を考慮する場合、仮案では、十分な拡張余地が得難い。

3. 中央図書館が箱崎・浜両地区にわたって学習図書館的機能を果たすためには、仮案の位置は、文科系4学部へ偏しているの、旧館が工学部へ偏していたのと条件的に余り変らず、適地とは言えない。

4. もっとも重要な問題は、敷地の決定であり、これまでも第1候補地に挙げられながら、農学部の賛成を得られなかった農学部旧本館の木造建物を撤去した跡に農学部が緑地帯を索定している場所が最適地であることは、現在も変わらない。（第1図参照）

5. 文科系4学部教官の要望が大幅に盛り込まれた諸学術資料センターや古文書部などを含んだいわゆる北川構想は、現行基準内では、かなりの縮小・整理を余儀なくされるであろうし、要員についても、文科系4学部の図書掛の現員を振り替えない限り、中央図書館には、これに割くことのできる余裕人員はない。

6. 建物の各要素についての学内の要望は、すでに北川館長時代にほぼ集約され、論議されたと解すべきであり、再びポリシーから商議委員会などでやり直し審議をして時間を掛けるよりも、図書館側が平面計画などの図面化を進め、具体的なイメージ作りをすることが大事な



第1図 箱崎地区・浜地区配置図

時期である。

といった内容の意志統一をおこなった。

とくに敷地問題では、年々過密度を増している箱崎地区内に残された唯一の風致地帯である緑地帯には、一切の建築物を認めないとする農学部側と、緑地帯の中は、環境から見ても、図書館敷地として最適であるとする図書館側との双方の意見は、完全に折り合わないという過去の交渉実績があった。

しかし高木館長は、大学紛争後の農学部内の変化をも考慮に入れ、農学部の協力を得るための条件について根気強く打診を続ける一方、大学紛争による九州大学の教育・研究環境の荒廃を憂慮していた入江英雄学長と話し合っ、このような時期にこそ新館建築が必要であるとして、学長を委員長とし、学部長の代表を委員とした九州大学新図書館検討委員会を評議会の承認をうけ発足させた。

この委員会の任務は、「新設する予定の九州大学附属図書館の性格、機能、組織、規模、場所等に関する基本的な問題について審議する、」とされ、必要に応じて専門委員会を置くこともできることになっていた。しかし、附属図書館の運営についての重要事項を審議する機関としては、すでに商議委員会があったわけであるが、

その他にこのような検討委員会が組織された意味は、商議委員会のレベルを超えた緊急性があり、政治性が濃い問題を処理しようとするところにあり、学内手続の上でも、評議会までのステップを簡明にしようとしたものであった。事実、専門委員会も置かれず、最重要案件であった敷地問題の解決に貢献したあとは、とくに会議の招集を必要とする局面はなかったが、全学のコンセンサスを得るためには、この検討委員会の権威は、図書館側にとって商議委員会とは比較にならない大きな力となった。

委員の1人となった農学部長は、この検討委員会の総意をバックにして、緑地帯予定地の提供について学部内を説得し、農学部教授会の承諾を検討委員会に持ち帰った。各委員もまたそれぞれの立場で農学部整備計画の促進についての支持を約束し、学内共通経費の審議機関である全学経理委員会および評議会は、予定敷地内の温室・甬場・飼育室などの移転整備のための経費を学内全部局の拠出によるいわゆる共通経費で賄いたいとする学長の要望を承認した。これで緑地帯問題は、一気に解決し、文字どおり地に足の着いた概算要求が文部省に対して可能になった。

一方、商議委員会では、図書館側として北川構想が現時点での完全実現が難しいことを各委員に納得して貰う





## 九州大学新中央図書館建設の経緯

必要があった。とくに文科系4学部の委員にとっては、諸学術資料センターや古文書部は、既得権のように考えられていたので、問題が混乱するおそれはなくはなかったが、文科系4学部の現図書掛を資料センター要員には充てないという4学部の意志が確認されたので、人の面でも困難があることが各委員に諒解され、図書館側が将来のレファレンス機能の拡大に関連づけて考えたいと提案して収拾された。そこで図書館側から過去のいろいろな仮定や提案を整理する意味で新たに次の「新総合図書館に期待される機能」を示し、具体的計画は、この線に沿って進めることについての承認を受け、さらに検討委員会の承認も得た。

### 新総合図書館に期待される機能

1. 全学図書館行政の中核
2. 箱崎キャンパスにおける学習図書館
3. 全学学生のための教養図書館
4. 総合目録の整備による全学的書誌調整と所在調査
5. 全学的な観点から収集された参考書誌によるレファレンス・サービス
6. 部局間にもたがって利用される資料あるいは全学の蔵書の欠漏を埋める資料の収集と利用
7. 古文書など特殊資料の専門的管理
8. 電算機利用による情報管理
9. 全国的あるいは地域的図書館協力体制への参加。
10. 国際交換業務の中核
11. 全学的要求に応える文献複製サービス
12. 図書館に関する調査研究と全学図書系職員の教育研修
13. 箱崎キャンパスにおける図書整理業務の中核
14. その他、中央図書館的諸機能

ここでは、中央図書館ではなく、総合図書館という名称が使われているが、組織としての図書館と施設としての図書館とが未分化の状態で性格づけられてきたことに因る。北川構想の中央図書館は、総合図書館より上位概念で取り扱われているが、九州大学における事情に合わせた考え方から、のちに新館は、施設としての中央図書館と呼ばれることになり、総合図書館の名称は、組織を考える場合の用語となり、対外的には、全学の図書館機構の統合体である附属図書館の名称が使われることになった。(第2表参照)

### IV. 具体的準備作業の開始

敷地の決定によってにわかにはじめた新館建築

計画は、事務的あるいは技術的な詰めが必要になってきた。1970年5月1日現在のデータによって資格面積(現段階における建築可能面積)を試算したところ第1表に示すように8,059平方メートルという延面積が出てきた。この面積を増すためには、旧館を図書館以外の目的に転用する以外にないが、実情は、旧館の転用を希望する部局はあっても、それを受け入れるための資格面積の余裕を持っているところがないので話が成り立たないということも、次第に明らかになってきた。また農学部書庫も、旧館同様に耐用年限未満のために取り壊すことができないということになった。これを農学部の資格面積に含めると、農学部の現在進行中の整備計画が大きな手直しを迫られることになり、敷地問題が振り出しに戻るおそれもあり、結局、新館は、8,059平方メートルで平面計画を作成することとなり、12,000平方メートル台は、夢となった。

1971年に入り、待望の予算内示の朗報がもたらされ、九州大学の総合的将来計画を審議する計画協議会が文部省内で開かれた。

1. 中央図書館の建設位置を浜地区から箱崎地区旧農学部本館跡に変更する。
2. 現中央図書館は、保存図書館に転用する。
3. 浜地区の文科系書庫は、中央図書館の第2書庫として継続使用するが、今後拡張しない。
4. 農学部書庫が将来撤去されるときその面積は、中央図書館の増築分資格面積として留保される。
5. 新築を理由とした人員要求はおこなわない。
6. これをもって、箱崎・浜両地区における図書館整備計画は、ひとまず終る。

以上が文部省施設部と九州大学の代表者間とで確認され、延面積は、8,060平方メートルに決定した。

建築設計は、外注せずに大学施設部でおこなうという方針も固まり、まず、建築課のスタッフと筆者との間で、双方の案を持ち寄り、あるいは往復して検討を重ねたが、その結果は、商議委員会に図面に模型を添えて提示された。商議委員会では、予定地の環境保全と地下水位の問題についての注意喚起があったほかは、原案について修正を求める意見はなかったといってよい。高木館長は、建築についての意見を調整するための小委員会設置の腹案を持っていたが、各商議委員ともその必要性を重視せず、以後の計画の技術的部分は、大学施設部と図書館事務部とに委ねられることになった。

当初は、最下階が半地下構造となる4階建の計画で進

められたが、大学施設部の設計スタッフに筆者が加わって、文部省施設部の大串不二雄技術参事官と数回にわたり意見調整をした結果、地上3階建て、1階に書庫を納め、2階に主入口を設け、2・3階にかけて大きな吹抜部分を持つ案に落ち着いた。

このようにして平面計画の概要が1971年夏までに固まったので、図書館としては、館報「図書館情報」の7巻8/9合併号<sup>2)</sup>にその内容を発表し、さらにそれは、「大学広報」に転載された。

9月以降は、設備課所管の電気、ガス、給排水、エレベーター、空調・冷暖房工事などの設計打ち合わせもはじまり、筆者の方でも図面に掛かり切りという毎日が続いた。大学施設部のスタッフは、筆者を通して申し入れられる図書館側の意見を、一方の専門家の意見として受け取ったので、それらは、敏速に技術的解決を見た。

その頃、いわゆるドル・ショックが経済界をゆるがしていたのであるが、新館にとってこの事態は、好材料として働き、当初の予想よりも一段と良い仕上がりになるであろうと考えられた。入札の結果、建築工事は、佐藤工業株式会社福岡支店が落札し、12月28日に着工したあとは、天候に恵まれ、工事は、極めて順調に進行した。

1972年に入って図書館では、文部省に対する2つの予算要求のための作業がおこなわれた。その1つは、「建物新営に伴う設備費要求書」の作成であるが、これは、確定した平面計画をもとにして、必要備品等を新規購入と転用とのすべてについて図面上に配置を示し、購入品については、仕様、規格、価格を明らかにするほか、主要なものや特殊なものについては、商品カタログや図面を用意するもので、そのリストは、使用目的別・室別の床面積表、室別の備品配置表、そして購入品の分類別集計表などから成り、配置図は、各表と照合しやすいように色分け表示された。あと1つは、「建物新営に伴う移転費要求書」の作成であり、旧館および各部局から新館に移動を必要とする資料および諸物品のリスト化であったが、資料は、梱包された状態を想定して、物品は、1点1点について実重量あるいは容積の重量換算で集計され、賃金、材料費、運搬器材損料などについて時価計算したもので、旧配置場所ごとにまとめられた。これら2つの作業は、手掛けて見ると意外に煩瑣であり、作成には、時間を要した。

## V. 各学部における関心の変化

現実には新館建築工事が活況を呈してくるにつれて、箱崎・浜両地区の各学部それぞれ異なった新しい反応が現れはじめた。

まず、新館の敷地の提供者の立場になった農学部は、当初、学生の利用の便についてのみ関心を示していたのが、研究者についても考えはじめた。しかし現実には、学部内に資料が分散されている状態が改善されない限り、学部内の意見をまとめるにはなお時間が掛かりそうであった。これに対し理学部は、学術雑誌の集中管理方式にすでに成功しており、学部研究室の資格面積を割いて設けられている中央図書室を拡張することと、目の前に建築される新中央図書館に中央図書室を資料、機能の一切を挙げて移すこととで何れが有利であるかが検討され、学部内の大勢は、新館への移動に傾きつつあった。

筆者は、非公式ではあるが、理・農両学部の図書委員会で意見を述べる機会を何度か与えられ、図書館側の構想には、理工系学部教官・大学院学生の利用についての予測が取り込まれていること、理学部中央図書室が資料集中化をおこなったのちは、他学部からの利用が急増していること、資料の学部間あるいは学部内重複の実情、新館の環境、各研究棟からの距離、夜間開館・相互貸借・文献複写などの諸サービスがもたらす利益、レファレンス・サービスの効果などを説明し、とくに農学部図書委員に対しては、理学部との比較において、学術雑誌の購入点数が同数であるのに、種類数において農学部が極端に劣っているのは、分散化による重複があるためであることを説明した。

1972年も半ばを過ぎる頃になって、両学部共その態度を決定する必要に迫られ、図書館長と両学部長との個別折衝が繰り返された結果、理学部は、中央図書室の資料および機能を挙げて中央図書館に移し、図書室職員は、学部在籍のまま図書館長の指揮監督下に入ることにする、農学部は、理学部の現状程度まで資料とくに学術雑誌の集中化を図ることに努める、学部図書室に受入・整理業務を従来そのまま残し、中央備付の決まっているカレント学術雑誌および二次刊行物は、理学部と同一書架上に置く条件で中央図書館の研究者閲覧室に展示して公開利用させ、バックナンバーは、中央図書館の書庫に収容する、この措置に伴う要員については、常時3名を学部図書室から派遣し、カウンター勤務に配置できるように

する、以上の諸点が決定し、両学部の資料の移動は、中央図書館の移転計画に正式に組み込まれた。

こうした動きに反して文科系4学部は、従来の研究室に密着した書庫が第2書庫として残されることになったことと、北川構想中の諸学術資料センター実現の可能性が薄くなったこととによって、一部の古文書・地方史料研究者の貴重書の管理についての関心を除いては、新館への期待度を減じたように見え、大学紛争の一応の鎮静化と共に、研究室備付図書開放利用を求めていた文科系学生の声もやがて弱まってきたことも作用したか、文学部のいわゆる図書館方式への改革案も棚上げとなり、文科系4学部教官は、再び元の殻すなわち学部毎に図書室を持つ従来からの研究第一主義の体制に戻ることを選んだ。こうした中で学生は、「図書館情報」に発表された新館の計画内容が、学生への配慮という点では、彼等の予想を遙かに超えていたため、抗議・要求行動なども組織することなく、むしろ大きな期待を持って工事の進行を見守っていたことが窺える。

残る問題は、工学部との調整であった。新館建築による直接の受益は少くとも、理学部所蔵の基礎科学関係の文献資料が利用しやすくなることは、工学部にとっても歓迎すべきことであり、学部としての歴史が長いだけに各研究室が稀用図書を多数抱えている状態を旧館の保存図書館転用により改善できることも、明らかであった。しかしそれだけでは、工学部学生の図書館が遠くなるという心配を解消したことにはならない。実際に新館が機能しはじめれば、その快適な室内環境だけでも、学生が距離の遠近を問わぬことになるとは思われるが、もし旧館に学習スペースを設けることができれば、学生への配慮という点では、万全なものになるであろうという考えに立って、図書館長と工学部長との間で、旧中央図書館1階の一部に、図書館側としては、学生閲覧室のスペースを確保する、このスペースは、工学部学生専用としない、工学部図書掛3名が本来の業務を抱えたままこの場所に移り管理に当る、その管理の範囲には、保存図書館利用者の出入のチェックも含まれる、工学部学生のための指定書は、中央図書館備付のものと同種のを工学部予算で購入し、この閲覧室にも備え付けるようにする、冷暖房など管理経費は、工学部が負担する、などの一連の合意を見た。

ここに至るまでの折衝の中で、要員の問題は、折から進行中の国家公務員の定員削減との兼ね合いから、慎重に取り扱われたが、結局は、各学部のそれぞれに異なる考

え方に応じて多様な解釈を見ることになった。

研究者の利用についての問題は、意外と調整に時間を要し、開館間近になっても、利用規則の成案が得られなかった。これには、学部間だけでなく、学部内の学科・講座間にも主張の相違があり、一般通則と学部の要望を取り入れた細則とから成る新規規則を4月を目標に作成することとして、仮規則によって“見切り開館”することとなったが、新規規則は、その後商議委員会の承認を受け、4月1日から効力を発した。

全体的な経過から見て、新中央図書館は、工事の進捗状況に合わせるように学内の関心と支持をふやして行き、建築以外の懸案であった定員や予算の問題でも徐々に学内の理解が高まってきた。これには、時が解決したという面も、確かにあろうが、高木館長の明敏な政治力に負うところが極めて大であったということができよう。

## VI. 保存図書館の実現

旧中央図書館の転用計画は、さきの北川構想の中でも、保存書庫、理工系指定図書室および自然科学系研究資料室の設置を挙げていたが、資格面積との関連についての説明不足があった。しかし文部省との折衝経過にも明らかなように、旧館は、その耐用年限の面から存置が決まり、学内他部局に受け入れ条件が整わない以上、図書館の用途以外の転用は考えられないことも確実になった。そうなれば、新館の面積に旧館分を加えることは、不可能となるので、書庫面積の効率的利用の観点から、当然のこととして保存書庫を設置して、新館の書庫には、リビング・コレクションを収容する考え方が浮び上がってくることになり、保存書庫転用案が再確認され、研究資料室あるいは標本陳列室転用案は、図書館の用途とは考えられないとして計画から外された。

旧館を保存書庫に改造した場合、旧閲覧室などは、書庫としての荷重計算をしていないという制約はあるが、旧書庫と合わせて、全館で40~45万冊の収蔵能力があり、中央図書館が5~6万冊を残置しても、少くとも34万冊分の収容余地が各学部の稀用図書のために提供できることが試算された。

また第1段階では、各学部からの搬入資料を各学部毎に納架することになるが、第2段階では、搬入資料の一元的な、選別、整理、保存、交換、廃棄が実施できるようにし、コレクションを完全にするための収集もおこなひ、資料センター的機能を持ち得るようにする、そして

第3段階では、これを学内的なものから地域的なものと拡大するという方針が諮議委員会において承認され、以後は、保存書庫 (storage library) ではなく、保存図書館 (deposit library) と呼称することになった。

この決定に基づき予備調査がおこなわれたが、その結果各学部から合計 32 万冊の搬入希望が示されたので、図書館側も、新館の整備と並行してスチール書架取付工事を一気に実施し、1973年3月末までに受け入れ準備を終った。各学部は、4月以降にそれぞれの計画によって、リストあるいは目録カードを添付して資料の搬入をはじめたが、1974年3月末までに約30万冊の搬入が終っている。

この保存図書館は、結果的に九州大学における図書館行政上の大きな収獲となったことは疑いがない。利用面では、中央図書館に理・農両学部の、保存図書館に工学部の学術雑誌バックナンバーが収容されたため、相互利用とくに複写サービスの能率向上にプラスになり、学内の資料収集に使われていた小型貨物自動車を廃車にすることができた。また資料面では、工学部での利用価値が減衰した炭鉱・電力・製鉄・造船関係の古い文献が、我が国のエネルギー産業や重工業の発祥地である北部九州の産業経済・社会労働・科学技術史料として蘇生する機会を与えられることにもなった。

## VII. 竣工、移転そして開館

予定より20日も早い1972年11月10日に待望の竣工となった。竣工検査が綿密に実施され、建物が図書館側に引き渡された後も、除湿を兼ねた空調設備の試運転が続けられた。しかし建物新営に伴う設備費および移転費の本省からの予算示達が12月に入ってしまったので、図書館側としては、年内移転完了は無理と判断し、12月は、備品調達計画や移転実施計画の詰めの作業が、会計掛を中心に強行日程で進められた。

一方、1972年夏頃から、別の準備作業が書庫を管理する閲覧掛によって進められていた。移転前の書庫点検、貴重本および和装本の梱包、保存図書館に残置すべき資料の選択と目録上のチェック、旧館では分類配架されていた逐次刊行物を、新館に移動する時点でアルファベット順配架に切り替えるための現物の抜き出しと梱包、目録上の変更処理、新館書庫内のガイド作成など、地味で困難な作業が、書庫内利用の休止にはじまり、段階的に執られた閲覧業務の縮小あるいは休止の措置に合わせておこなわれた。

1973年に入り、計画どおり1月9日から同月20日までの間に中央図書館の移転が開始されたが、4月の学会シーズンを控え、1～2月に利用が多くなる理・農両学部所在の資料の新館書庫への搬入は、3月10日から同月19日までに時期がずらされた。これらの期間中の作業は、すべて運送業者の手で進められ、旧館の書架上の資料は、予め閲覧掛員が指示したとおりに新館の書架に移動した。また日常業務とくに会計年度末を控えた受入・整理業務が移転により停滞することのないようにとの配慮から、全事務室とカード目録の移動は、該当日に関係掛長のみが立ち会いのため出勤するというので、1月13日(土)から15日(月・成人の日)にかけて実施され、館員は、13日午前中に身の回りの書類などを梱包して退庁した後は、連休明けの16日には新館に出勤し、書類などをそれぞれの場所に納め、家具などの位置を業者側の手をもって補正したのみで17日には平常の勤務態勢に入ることができた。閲覧部門では、自習室が旧館で最後まで開室されていたが、事務室部門同様、連休を利用して家具類を移動したため、学生は、16日から新館2階の自由閲覧室を専用階段から入って利用できるようになった。こうして旧館から職員が去り、1月16日中に電話の移設もおわったので、図書館長から学長に宛てて文書をもって附属図書館事務部の所在地の移動を報告し、同時に学内各部局にもその旨通知した他、郵便局にも所在地変更手続をしたが、この日からは連日のように新規購入物品の搬入があり、新館内部は、にわかに活況を呈してきた。

移転経費は、中央図書館分738万円、理・農両学部分529万円、計1,267万円を要したが、労賃の経費中に占める割合は、80%を超え、梱包・養生材料費や運搬機械・トラック損料などの比ではなく、たとえ今回のような僅々700メートルのトラックの走行距離であっても、梱包・積み込み・荷下ろし・開梱の作業量は、長距離移動の場合と変わらないとすれば、延動員数を最少に抑えて作業効率を上げる方策を検討する必要があった。その結果、全体の作業日程を見通して、機械力と人力との組み合わせを詳細に検討しながら、1日ごとの作業と人員との関係が計算され、動員力・機械力・技術経験などの総合的観点から、日本通運博多港支店に作業を発注した。

移転規模の割には短かった作業日数は、図書館業務の面にも利益をもたらした。例えば、新・旧両館の管理の重複回避、日常業務の早期再開、開館準備期間の短縮などに貢献した。

## 九州大学新中央図書館建設の経緯

基本的図書館家具の閲覧テーブル、カードボックス、独立書架などは、建物内部の仕上げに合わせて独自にデザインする方針を採ったので、調達が終わるまでにまだ数日あったが、新館建築の功労者である高木館長の任期満了が2月9日に迫り、教授としても、3月末で停年退官が予定されていたことから、全学に新中央図書館の落成を披露する式典と祝宴が2月6日に池田敦好学長以下が出席しておこなわれた。そして、閲覧室の整備も終わった3月6日に新任の松浦良平館長の第一歩によって、午前9時ちょうどに正面玄関の自動ドアが開き、正式開館の運びとなった。

### VIII. 新中央図書館の設計概要

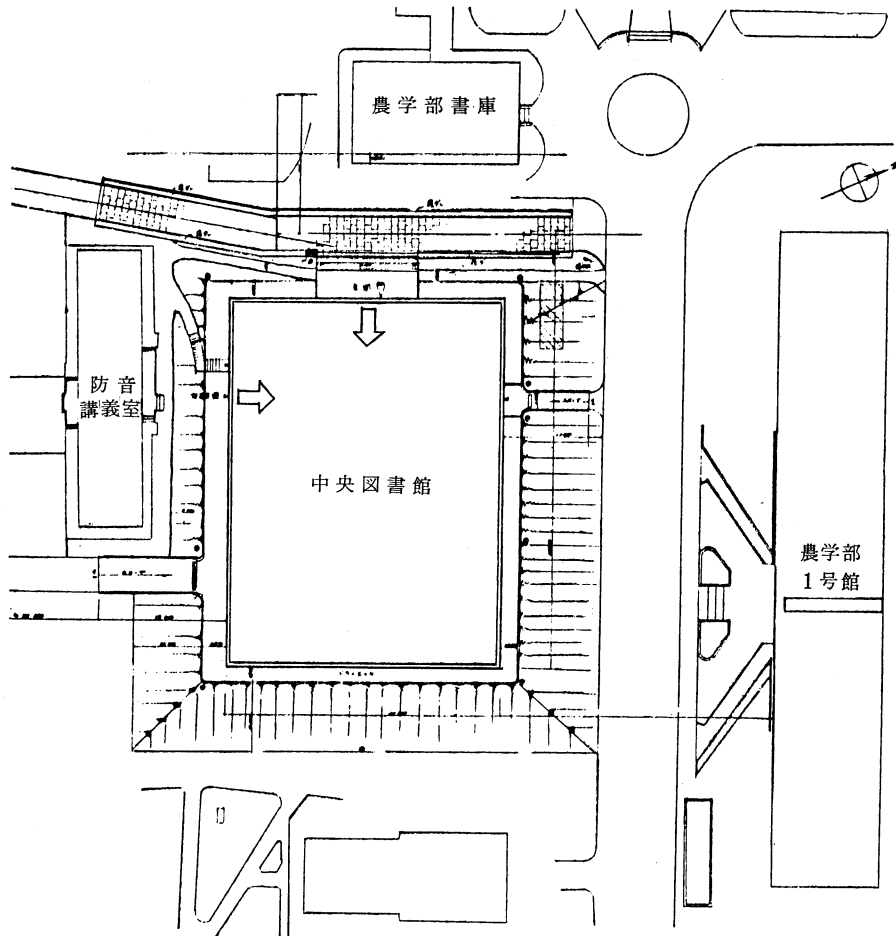
これまでの記述は、努めて客観的に事実の経過を追

い、旧帝国大学という歴史的背景を持つ国立総合大学において進められた中央図書館建築計画の管理的、行政的側面を取り扱おうとしたものであるが、建築についての報告である以上、技術的データを含んだ記述を省略するわけにはいかない。以下は、その概要である。

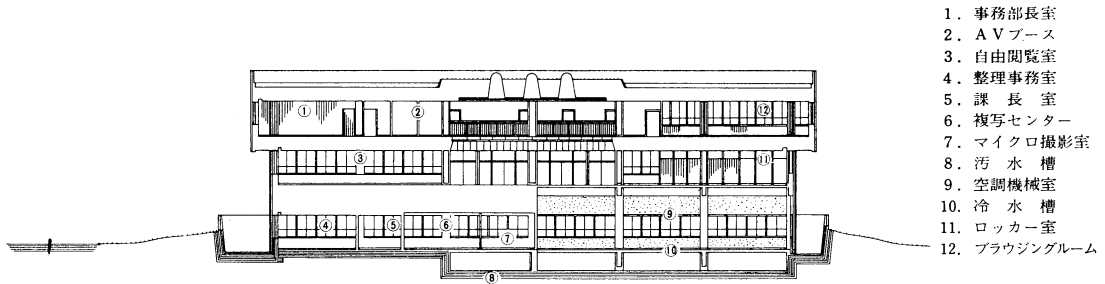
#### A. 基本方針

計画の当初に、大学施設部と図書館との間で基本的に合意した点は、およそ次のようなものであった。

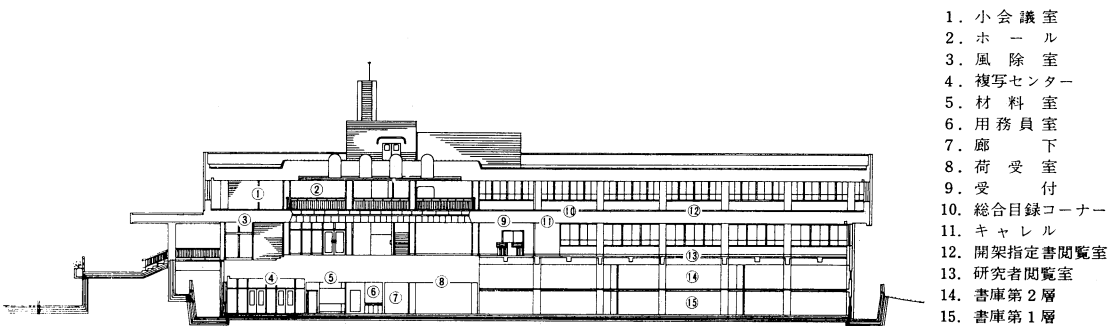
1. 機能を優先して考え、単純明快な利用動線を目指す。
2. チェック・ポイントを最少限に絞って要員の節約を図り、将来の利用機能の拡大を念頭に置きながらも、現在の人員でまず管理することを考える。
3. 経済性を考慮した構造とする。



第2図 配置図



第3図 縦断面図 1/500



第4図 横断面図 1/500

4. 設備関係については、省力型のもを採用する。

5. 居住性を快適にする。

**B. 敷地における制約 (第2図参照)**

1. 農学部からの要望があるので、農学部本館とは、最小限 40メートルの間隔を保つこと。

2. 防音講義室および農学部書庫を支障建物として撤去できる見込みはない。

3. 敷地周辺の樹木には、学術的価値のあるものがあるので、保護に万全を期すること。

**C. 計画の全般的な考え方 (第1図～第9図参照)**

1. 地上3階として、構造上、荷重の大きい部分を最下階に入れることの有利性を考え、1階の東半分は2層の書庫を取り込み、1階西北隅に書庫2層分に当る高い天井高を活かして機械室を位置させた。

2. 主入口は、理・工両学部、農学部、文科系4学部各方向からのアプローチと、東側にできるだけ緑地を温存することを考慮して、建物の位置を西寄りに定めたことから、将来の拡張方向と反対の2階西側中央に設けられた。

3. 主入口への導入路は、緩いスロープを造成し、

階段を少なくして2階に入るという抵抗感を減殺した。

4. 建物の周辺は、現在のグラウンド・レベルより高く盛土して芝生を張り、さらに擁壁を築いてドライ・エリアを形成したので、外観上は、1階の下半分が地下に隠れ、2階部分が1階であるような感じになっている。

5. 1階南側(理学部側)に職員出入口および車庫兼資料搬入口を設け、北側(農学部側)に通用口兼非常口を設けた。このため、ドライ・エリアは、自動車の出入を考え、南側のみ広く3.5メートルとした。

6. 1階は、2層の書庫、2階(主階)は、研究図書館の機能、3階は、学習図書館の機能をそれぞれ重点とした平面計画となり、1・2・3階を通じて南側に事務部門を位置させた。この配置により、利用者は、北側階段を使用して、職員は、南側階段を使用して、資料は、南側階段横の700キログラム用1基と、2・3階の閲覧事務室と書庫とを結ぶ400キログラム用1基の2基のエレベーターを使用して昇降することとし、動線の不要の交錯を抑えることができた。

7. ワンポイント・チェックを目指した結果、メインカウンターは、水平的にも、垂直的にも、建物の中心

になる位置に設けられた。

8. モデューラ・プランが検討された結果、小室を作るときの有利さから、長方形の 6.75 m×5.40 m のモジュールが標準書架寸法などから割り出された。建築面積は、6×10 Bays となり、正方形に近づけようとした努力によって、外壁の面積も節約された。また高さは、1階 5 m、2・3階 3.8 m、塔屋 3.5 m、計 16.1 m となった。

9. 箱崎地区が板付空港の航空機発着コース下にあるという特殊事情から、騒音対策のため全館 2 重窓としたことから、全ての館内設備に優先して全館空調が考えられた。

10. 計画に大きく影響した要素としては、1971 年 4 月に改正された建築基準法による防災上の規定があった。とくに、「500平方メートルごとに防煙隔壁を、1,500平方メートルごとに防火隔壁を設けよ」という義務条項は、モデューラ・プランで強調されている平面計画の融通性と矛盾し、また建築材料の上でも制約を受け、技術的解決を要する問題であった。「天井高 5.5 メートルごとに耐火スラブを設けよ」という条項は、積層書架の構築上問題となるが、新館の書庫は、2 層に止まったので

影響はなかった。

D. 館内配置の概要(第 5 図～第 9 図、第 3 表、第 4 表参照)

1 階

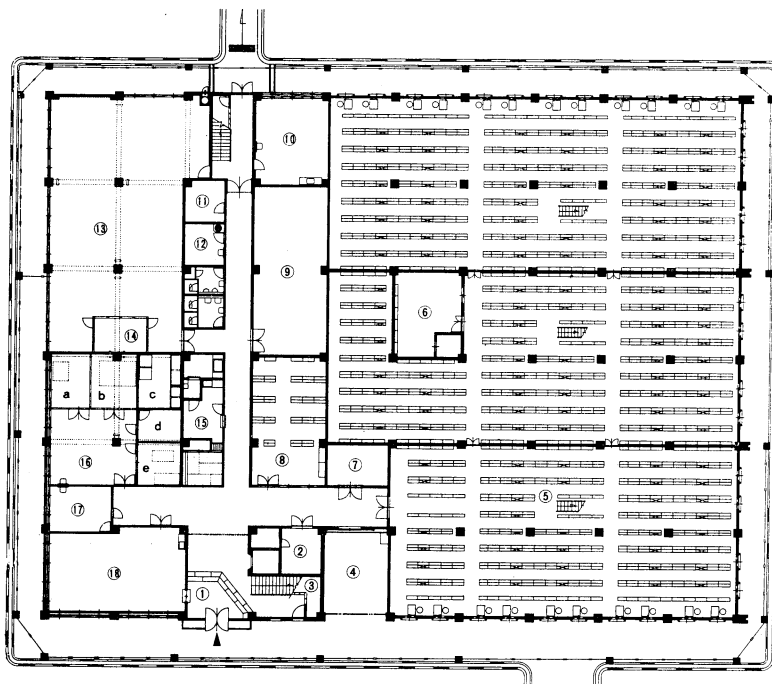
1. 職員玄関：南側(理学部側)に設けられ、附属図書館事務部の玄関として、職員、業者などの出入口となる。人荷用エレベーターと業務用階段に近ずきやすく、廊下を直進すると北側(農学部側)通用口に到達する。

2. 庶務・会計事務室：人事・文書・渉外などの庶務関係事務、予算経理・用度・給与・庁舎管理などの経理関係事務がここで執られる。職員玄関に受付窓を開く。

3. 総務課長室：執務スペース

4. 複写センター：マイクロフィッシュ撮影室、電子複写機室、オフセット印刷室、写真暗室、材料庫および事務室から成る。

5. 宿直室・用務員室・浴室：この 3 室の入口は、用務員室にまとめてある。宿直室は、和室 4.5 畳、用務員室にキッチン、浴室に浴槽・シャワーを備え、これらの給湯は、A C 機械室内の大型ガス湯沸器が使われる。



- 1. 職員玄関
- 2. 消毒室
- 3. 倉庫
- 4. 車庫
- 5. 書庫(第 1 層)
- 6. 作業室
- 7. 用品庫
- 8. 荷受室
- 9. 電気室
- 10. 職員休憩室
- 11. 更衣室(男)
- 12. 更衣室(女)
- 13. A・C 機械室
- 14. 操作室
- 15. 用務員室
- 16. 複写センター
  - a. マイクロフィッシュ撮影機室
  - b. 電子複写機室
  - c. 暗室
  - d. 材料庫
  - e. 印刷室
- 17. 総務課長室
- 18. 庶務・会計事務室

第 5 図 1 階平面図 1/500





## 九州大学新中央図書館建設の経緯

第4表 室別・階別床面積表

階	室名	座席数	管理部門	収蔵部門	利用部門	通路その他	計
		席	m <sup>2</sup>	m <sup>2</sup>	m <sup>2</sup>	m <sup>2</sup>	m <sup>2</sup>
1	庶務・会計事務室		72.900				
	総務課長室		18.220				
	複写センター		109.350				
	宿直室・用務員室・浴室		30.370				
	A C 機械室		218.700				
	電気洗濯室		72.900				
	手洗い更衣室		14.475				
	職員休憩室		20.350				
	荷物受毒室		37.395				
	消用品室		54.670				
	用車庫		11.440				
	エレベーター (A)		18.220				4.400
	エレベーター (B)		37.395				4.000
F	パイプダクト					3.465	
	玄関・廊下・階段など					217.070	
	図書雑品庫 1	22		1,211.920			
				32.460			
	計	22	716.385	1,244.380	0.	228.935	2,189.700
中2	エレベーター (B)					4.000	
	書庫 2	25		1,301.450			
F	計	25	0.	1,301.450	0.	4.000	1,305.450
3	玄関	32				70.740	
	玄関ホ	6			365.125		
	新開	6			150.700		
	ロック	12			60.835		
	特別	5			19.935		
	キヤ	53			642.065		
	研究者	40					
	レファレンス・ルーム	40					
	閲覧・レファレンス事務室		72.590				
	自由閲覧室	76			150.700		
	総合目録コーナー				237.490		
	整理課長室		20.020				
	閲覧課長室		20.020				
	整理事務室		223.020				
	用品		11.440				
	手洗い所 (A)		45.964				
	手洗い所 (B)		20.020				
F	エレベーター (A)					5.250	
	エレベーター (B)					4.400	
	パイプダクト					3.465	
	廊下・階段など					65.921	
	計	224	413.074	0.	1,626.850	149.776	2,189.700

第4表 室別・階別床面積表 (つづき)

階	室名	座席数	管理部門	収蔵部門	利用部門	通路その他	計
		席	m <sup>2</sup>	m <sup>2</sup>	m <sup>2</sup>	m <sup>2</sup>	m <sup>2</sup>
3	休憩コーナー	40			272.815		
	記録コーナー				42.750		
	開架・指定書閲覧室	223			727.130		
	閲覧事務室		36.220				
	視聴覚室	84			145.403		
	調整室		26.317				
	A V プール	12			23.100		
	" (小室)	9			16.500		
	小会議室	15			31.050		
	演習室	24			45.675		
	ブラウジング・ルーム	43			143.045		
	研修室		30.130				
	館長室		59.850				
	事務部長室		47.880				
	準備室		20.020				
	用品庫		11.440				
	情報管理事務室		44.460				
	オペレーション室		21.460				
	パソコン室		28.130				
	計算機室		222.650				
手洗室		41.324					
エレベーター (A)						5.250	
" (B)						4.400	
パイプダクト						3.465	
廊下・階段など						198.856	
	計	450	589.881	0.	1,447.468	211.971	2,249.320
P H	倉庫		13.650				
	エレベーター機械室		19.560				
	" (B)		7.970				
	A C 機械室		38.850				
階段室						45.530	
	計	0	80.030	0.	0.	45.530	125.560
	合計	721	1,799.370	2,545.830	3,074.318	640.212	8,059.730

## 九州大学新中央図書館建設の経緯

6. AC機械室：全館空調のための機械スペースで監視室が設けてある。床下が蓄熱水槽になっている。

7. 電気室：変電所スペース

8. 男女手洗所：職員専用

9. 男女更衣室：職員専用で手洗所と職員休憩室とに近く位置させた。

10. 職員休憩室：カウンター勤務者など時差休憩を必要とする図書館に必須のスペースとして計画された。1970年から旧館でも設けていたスタッフ・ルームの機能をこの室と研修室とに分け、この室は、食事・休憩目的専用とした。軽食・喫茶のためのキッチンも設けてある。

11. 荷受室：受入図書の一時的滞留のスペースとして書架を配置している。位置については、資料搬入の動線を考慮した。

12. 消毒室：古書などの納庫前に防虫・殺菌処理が必要な資料に備え、メチルクロマイド瓦斯用真空滅菌装置1基が設備されている。

13. 車庫：官用車2台分のスペースが取られているが、屋間は、資料の搬入のためのデリバリー機能を持つよう設計された。とくに文科系4学部図書室との資料の受け渡し作業の能率化に役立っている。

14. 1, 2層合わせて約50万冊の収蔵能力を持つ。積層2層の書架は、日本ファイリング製の単柱式ダブルハンガー方式の書架が採用された。ダブルハンガー方式の採用により、約3万冊の収蔵能力が増している。学生用図書は、指定書を含み、ほとんど開架書架に収まるの

で、書庫内は、和装本が別置された他は、学術雑誌バックナンバーを主とした研究用図書で満たされている。南北両側にキャレルが設けられた。1階の車庫・消毒室・荷受室に近く業務用出入口が設けられているが、利用者は、2階のレファレンス・デスク横の昇降口から出入庫できる。また書庫2層の約9分の1のスペースを可動パネルで仕切って貴重書庫としているが、ここへの出入は、2階特別閲覧室からの専用階段を使用する。このような出入口の比較的自由的な設け方は、この建物の特徴の1つである。書庫を利用階の下に位置させることの利点であり、管理面での人員節約にもつながっている。

15. 雑品庫：製本準備のための資料集積スペースで閲覧事務室とを結ぶエレベーターがここに開口している。

### 2階（主階）

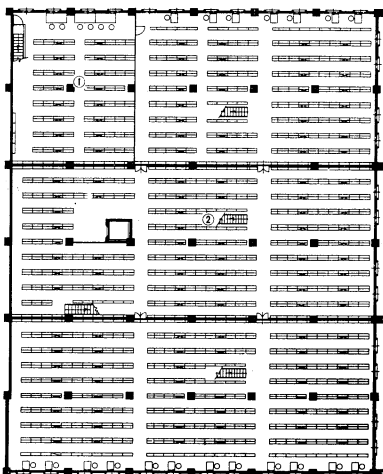
1. 玄関（主入口）：緩い傾斜の取付道路を上ってから、階段で1メートル上ってポーチに達し、2重の自動ドアのある風除室を抜け、階段で0.5メートル上ってメインホールに入る。自動ドアは、入口と出口との両方にあり、2階閲覧事務室内に開扉回数指示計がある。取付道路は、表面が粗い石材を使用しているため、靴底に着いた土砂が玄関内に持ち込まれるのを防いでいる。

2. メインホール：展示・待合・電話コーナーがあり、フラワー・ボックスが、入館者の誘導を考慮して配置され、コントロール・ポイントとしての機能を果たしている。上部は、吹抜となり、自然光と水銀灯照明が併用され、壁面には、ステンレス・スチールが使用されるなど、デザイン的に重点が置かれた。

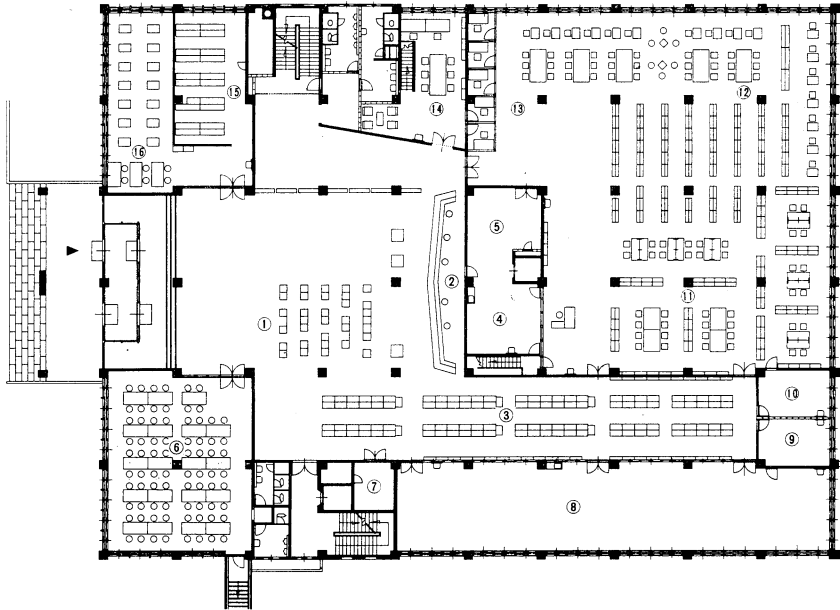
3. メインカウンター：ホールの正面奥に位置し、館内案内と利用者登録・入館・閲覧・貸出の諸手続および相互貸借・文献複写利用の申込受付がすべてここでこなされる。全館の中心部に当り、ここを出発点として放射する利用動線が考えられた。長大なカウンターのデザインは、総合目録コーナーのカード・ボックスと共に、ホールの雰囲気を一貫しており、前者は、大学建築課と伊藤伊、後者は、図書館と伊藤伊とが協力した。また、このデザイン・色調は、閲覧室内の家具にも適用された。

4. 新聞閲覧室：入館のチェックを受けずに入室でき、毎日到着の新聞が展示されている。

5. ロッカー室：入館者チェックの方式については、いろいろ議論が分れ、これを最善としたわけではないが、ロッカー方式で出発することになった。新聞閲覧



第6図 中2階平面図 1/500



1. 玄関ホール
2. 受付カウンター
3. 総合目録コーナー
4. レファレンス事務室
5. 閲覧事務室
6. 自由閲覧室
7. 用品庫
8. 整理事務室
9. 整理課長室
10. 閲覧課長室
11. レファレンスルーム
12. 研究者閲覧室
13. 研究個室(5)
14. 特別閲覧室
15. ロッカー室
16. 新聞閲覧室

第7図 2階平面図 1/500

室・自由閲覧室以外の室に入るときは、ノート、筆記具および許可を受けた5冊以内の参考書以外の所持品は、予めロッカーに預けることになっている。

6. 特別閲覧室：古文書・貴重書などの特別な管理下に置かれている資料を利用するためのスペースで、専用階段で貴重書庫に通じ、キャレル2室が附属している。卷子本などのための長尺の閲覧テーブルや複写用のトレース台が用意され、読史関係のツールが備付られる。休憩コーナーが設けてある。

7. 研究者閲覧室：名称は研究者としてあるが、学生の入室は自由である。教官・大学院学生のために、新着学術雑誌が常時展示されている。キャレル3室が附属している。

8. レファレンス・ルーム：研究者閲覧室と隔壁なしに接しており、レファレンス・デスクが開設され、約1万5千冊の参考図書が主題別コーナーを形成して配架されている他、新聞切抜、各国市街地図、各国大学案内などのインフォメーション・ファイルが充実している。

9. 閲覧事務室：閲覧掛員の待機スペースで書庫からのエレベーターが開口している。

10. レファレンス事務室：レファレンス掛員の執務スペースでデスクの状況が見通せるように透明ガラスで

レファレンス・ルームの間を仕切っている。

11. 自由閲覧室：学生の自習と館外貸出図書の利用のためのチェックなしで入室できる室で、必要に応じてこの室だけを開室できるように、専用階段と出入口および男女手洗所が設けてある。展示会などにも活用できる場所である。

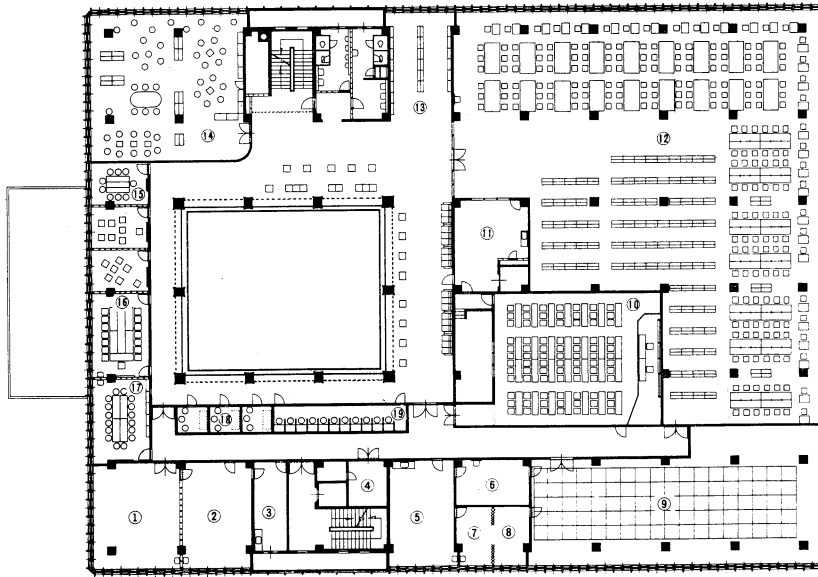
12. 総合目録コーナー：全学総合目録（カード）を収容するスペースであるが、米国議会図書館や大英博物館の書冊目録のほか、国内各大学の書冊目録や内外の出版目録が壁面の書架に収容されている。レファレンス・ルームと整理事務室との間に位置したことにより、レファレンス・閲覧業務は勿論、受入作業における重複調査、書誌的事項や価格の確認、目録作業における記述・分類の照合など整理業務の能率化に貢献できるよう配慮された。

13. 整理課長室・閲覧課長室：執務スペース

14. 整理事務室：受入・目録・分類作業のためのスペースでレファレンス・ルームに近接したため、高価な参考書誌・辞書類の重複購入が防止できることになった。1階からの資料の搬出入には、南側のエレベーターが利用できる。

15. 男女手洗所：自由閲覧室にあるものとは別に、北側階段横に設けられた。

九州大学新中央図書館建設の経緯



1. 館長室
2. 事務部長室
3. 準備室
4. 用品庫
5. 情報管理事務室兼相談室
6. オペレーター室
7. 休憩室
8. パンチ室
9. 計算機室
10. 視聴覚室
11. 閲覧事務室
12. 開架指定書閲覧室
13. 目録コーナー
14. ブラウジングルーム
15. 演習室(3室)
16. 小会議室
17. 研修室
18. A V 個室(3室)
19. A V 個室

第8図 3階平面図 1/500

3階

1. 休憩コーナー：メインカウンターでチェックを受け、北側を上った利用者は、ホール上部の吹抜部分を取り巻く回廊に出る。ここは、ほとんど中2階の感じである。その回廊が広がっている北側と東側の部分に休憩用家具が配置されコーナーを形成している。

2. 目録コーナー：学生用閲覧目録の収容スペースであるが、これらの目録は、段階的に廃止し、総合目録一本にする予定なので、将来は、閲覧関係の他の目的に転用することになる。

3. 開架・指定書閲覧室：学生用図書が開架配置されている。

4. 閲覧事務室：閲覧掛員の執務スペースで書庫からのエレベーターが開口している。調整室には、この室から入ることができる。

5. 視聴覚室・調整室：多人数で視聴覚資料を利用するためのスペースであるが、図書館がおこなうオリエンテーションやガイダンス、学内あるいは地区的な研修活動に利用されるほか、会議室としても活用できる。調整室を含めて、映写・録音・再生に必要な機材が備えられ、遠隔操作も可能である。

6. A Vブース：視聴覚資料を小人数で利用するためのスペースで、1人用ブース12を備えた1室と3人収容の防音室3室とがある。

7. 小会議室：16人程度収容できる会議スペースで、館内会議のほか、理・農学部などの図書委員会、抄読会に活用できる。

8. 演習室：図書館資料を利用したセミナーやグループ調査のための小室で、8人程度収容できる室が3室ある。

9. ブラウジング・ルーム：一般雑誌・教養書などを備え、カーペットや家具などインテリアを配慮した、くつろいだ雰囲気のある軽読書スペースである。

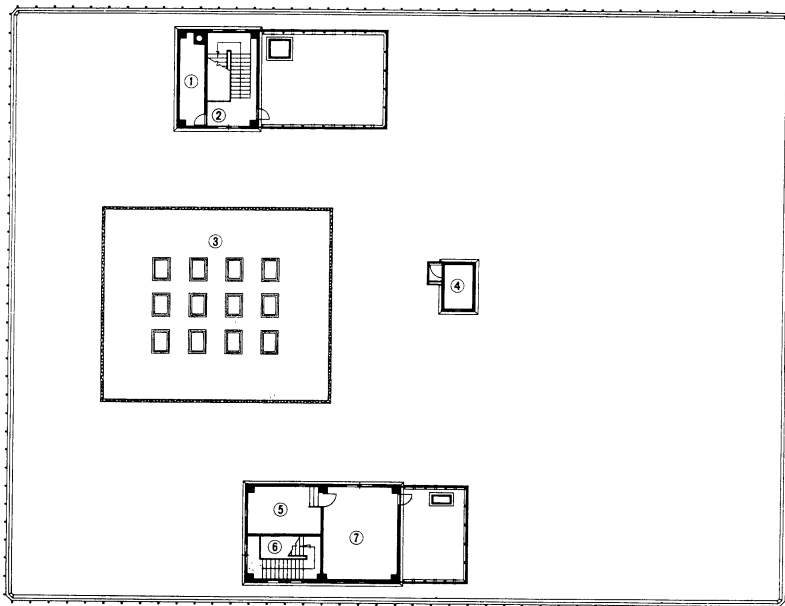
10. 研修室：図書館・情報学関係の資料を備え、今後の図書館サービスの質的向上を図る意味での全学図書系職員の日常研修の場所となる。20人程度の集会が可能である。

11. 館長室：執務・応接スペースととくに貴賓室としての機能が考慮された。

12. 事務部長室：執務・応接・小会議スペース

13. 準備室：会議などの場合の準備室でキッチンを設け、秘書室にも転用できる広さを考えた。

14. 情報管理関係諸室：今後の業務機械化・I Rに備えたスペースで事務室・パンチ室（パンチャーの休憩コーナーを含む。）オペレーター室・計算機室から成り、とくに計算機室では、配線の便が考慮され、2重床が採用されたほか、貸出業務のオンライン化を見越して、この室から2階メインカウンター下に通じるパイプダクト



第9図 屋上平面図 1/500

1. 倉庫
2. 階段室 B
3. ポリドーム
4. エレベーター機械室 B
5. エレベーター機械室 A
6. 階段室 A
7. A・C機械室

が設けられている。導入システムや電子計算機機種は、現在のところ未定である。このブロックの空調は、電子計算機導入時にそのサイズに合わせて冷凍機を据え付け、館の他の部分から独立して運転する方針を採り、すでにダクト配管を完了し、塔屋に機械室スペースが用意されている。

#### 15. 男女手洗所：2階に同じ

#### 屋上

理・農両学部の4階以上の研究室は、新館屋上からの照り返しを受ける位置にあるので、その防止のために黒色のアスファルト・ブロックが屋上に敷き詰められたほか、メインホール上部の吹抜部分の採光窓の亚克力樹脂製の天蓋を点景にした自然石積みの庭園風の一角を造り、職員休憩スペースとして利用できるようにした。

以上、平面計画の各要素について、その考え方を述べたが、工事費や施工などの工事基本事項については、第3表を、床面積や座席数については第4表を参照されたい。

#### E. 設備の概要

1. 空気調和設備：図書館の利用時間帯を考慮し、熱源は、本建物専用とした。A重油を使用する吸収式冷水発生機を採用し、冷凍機の少容量を図るため蓄熱水槽を設けた。送風方式は、事務室系統は、ファンコイル

・ユニット、閲覧室系統には、ファンコイル・ユニット+ダクト併用、ホールなどには、全ダクト方式が採用された。自動化により省力を図っている。書庫は、パッケージ型除湿機により除湿のみおこなっている。

2. 搬送設備：送り手と受け手が必要になり、積み降ろしの手数も多いという理由で、ダムウェータやベルトコンベヤの採用が見送られ、人がブクトラックと共に乗り込める大きさのエレベーターとして、400 kg 書庫用(6人用)、700 kg 人荷用(11人用)の2基が設備され、機械室は、塔屋に配置された。

3. 強電設備：構内特高配電所から1階の400KVA専用変電所に受電し、照明動力を供給する。

4. 弱電設備：防災関係としては、自動火災報知機・非常電話(消火栓に併設)と非常放送設備(一般業務放送・BGM 併用)が基準どおり設備され、電話は、ボタン式電話(デスクホン)が、総務・整理・閲覧の3系統に分け採用されたため、インターフォンは不要になった。

5. 照明設備：玄関ホールは、天然光線と水銀灯との混合照明、閲覧室・計算機室は、グレア防止のため、ルーバー付埋込器具を使用した。机上照明によらずに適正照度を得ることを考えた結果、主要室の机上照度(ルクス)は、開架・指定書閲覧室 679、特別閲覧

九州大学新中央図書館建設の経緯

室 455, 総合目録ホール 350, 整理事務室 340, 庶務・会計事務室 300, 計算機室 693 となった。通路・避難誘導灯や非常照明は, 防災基準にしたがって設備された。

付, 備品: 備品とくに主要室の家具の調達にあたっては, デザイン・色調などについて建築課の意見も徴した。新規購入分の総額は, 約 3,165 万円に上り, 図書館家具のほか, 視聴覚設備や消毒装置などがその主なものである。また, 旧館を保存図書館に再整備するために約 550 万円を要したが, その 80% は, スチール製書架の購入に充てられた。

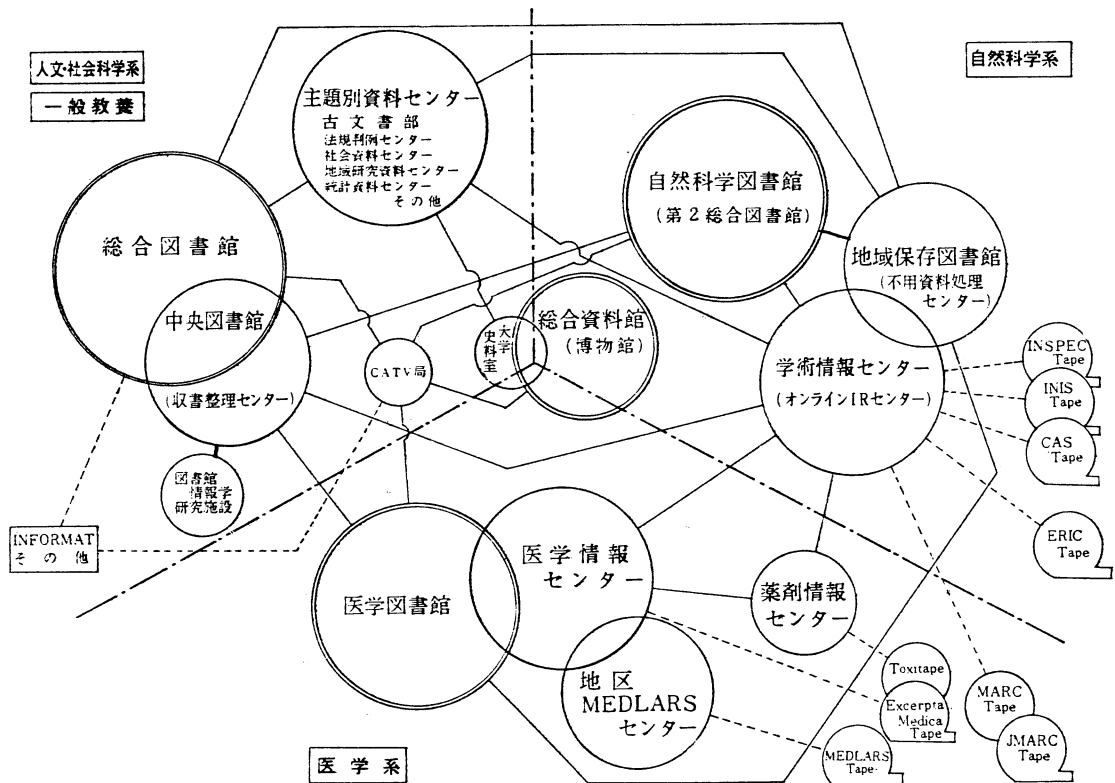
IX. 九州大学の将来構想と図書館

九州大学では, 大学紛争中の1969年4月に評議会に九州大学大学制度委員会が設置されたが, 同委員会は, 1969年10月に「委員会中間報告」, 1970年5月に「教養課程の改革について」, 1971年4月に「評議会の改革について」の3次にわたる評議会への報告書をまとめたが, 第3次報告書での示唆によって, 1971年12月に評議会は, 将来計画小委員会を設置し, 各部局に将来計画の提

出を求め, それを各部局に流して, さらに意見を求める作業をおこなった。

これまで九州大学では, 箱崎・浜両地区が航空機騒音と周辺の都市化のため劣悪な環境にあること, 教養部とキャンパスの統合を図りたいこと, そして将来の拡張余地がないことの諸点から, 適地を求めてキャンパス移転を実施したいという希望があったが, なかなか具体的計画にまで発展しないであった。1972年になり, 福岡市郊外の春日原米軍キャンプ敷地の全面返還が報ぜられると, 箱崎・六本松両地区を合わせた面積の3倍はあるといわれる春日原への移転は, 残された最後の機会とも考えられ, にわか大学当局の動きは, 現実的になって, 将来計画小委員会の作業も, 春日原米軍キャンプ跡の九州大学への移譲について関係方面との交渉スケジュールに合わせて急がれることになった。文部省も, この問題の推移を見守ることとしたため, 新館のように進行中のものは別として, 移転計画に載っていない医・歯・薬学系以外の新規工事計画は, 一時凍結の形となった。

図書館側としては, 高木館長の就任以来, 新館および



第10図 九州大学ライブラリー・システムの構成



これに関連する問題を努めて現実的に処理する方針を採り、問題によっては、“名を捨てて、実を取る、”といった面もあっただけに、フィロゾフィカルな議論が後廻しになったことは否めず、いずれは、全学図書館行政の中での新中央図書館の意識についての議論を詰めておく必要が生じてくるであろうと予測していた。また、北川構想以来の図書館体制についての諸提案は、商議委員会のレベルに留まっていたとも考えられ、評議会から、全学の将来計画の中での図書館構想を求められたことは、図書館の位置づけについての図書館側見解を全学の公式評価の場に持ち出すために有意義な機会となるとという判断から、まず、構想についてのイメージを与えるためのチャートである「九州大学ライブラリー・システムの構成」（第10図参照）が描かれ、「基本方針」と「将来計画の大綱」の2部から成る提案が文章化された。これは、見方によっては、春日原地区の地割りの骨格にもなるべき重大な内容を含んでいたにもかかわらず、“組織の将来像として適切である、”との評価を得、評議会において原則的に承認された。1972年11月22日付「大学広報」号外5に発表された「将来計画小委員会第1次報告」から“図書館”の部分を抜粋して見ることとする。

## 5. 図書館

### 5.1. 基本方針

1) これからの大学図書館の主たる任務は、学術情報管理の機関たるところにある。今日の社会においては、情報の生産・蓄積・配分の流れがすでに氾濫の状態にあるといわれるだけに、情報資料の選択・収集と整理、提供や通報への奉仕と共に、保存と廃棄もおこなう図書館機能は、ますますその意義を増しつつある。このような役割を積極的に果たし得るものとして、これからの大学図書館システムは構想されねばならない。

2) 今後の本学の研究・教育の発展を考えると、図書館活動の充実と展開がそれと不可分のものとして強力に推進されるのでなければならない。大学図書館は、大学における研究・教育を資料面から支えるための施設であるが、また、それ自身が大学における研究・教育活動にとり必要な一部分を担当することが認識されなければならない。とくに情報化時代の大学の研究と教育とを考えると、大学図書館による学術情報管理の機能を中心として諸施設は配置され、組織され、運営されることが必要である。

3) これからの大学図書館は、その情報管理機能

を最も効果的に遂行し得るように組織され、拡充されると共に、近時急速に発達しつつあるさまざまな情報管理技術——電子計算機・通信技術・複写技術・視聴覚機材等——を積極的に採り入れ、活用することが必要である。

4) 大学図書館を機能上から見れば、集中と放散のセンター機能を営むものとされねばならない。ここに集中というのは、物理的意味に限っていうのではなく、およそ学術資料の所在についての情報は、中央図書館に向けて集中されねばならぬことをいうのである。学術資料についての集中化された情報は、中央図書館から需要者に向けて放射される。こうして将来の中央図書館の1つの重要な任務は、学術情報に関しての大学におけるキー・ステーションたるところにある。

5) 学術情報センターとしての大学図書館の機能は、学外に対しても開かれねばならない。他大学との間の学術情報の交流・所在調査・確認などの協力関係が発展されるべきであり、とくに本学の場合には、西日本地区においての学術情報交換の地域的センター機能を果たすべきものであることは当然といえよう。

6) 現在、新総合図書館の建築が進行中であるが、それは、計画の上では本学の現キャンパスの狭さ、諸施設の既存の配置等による制約を被らざるを得なかった。そのような諸制約がないものと前提されるときには、上記の基本方針を最大限に満足させるため、次のような具体的諸計画が考えられる。

### 5.2. 将来計画の大綱

1) 九州大学ライブラリー・システムの構成（第10図参照）

#### 2) 総合図書館

a) その設置場所は、人文・社会科学系、一般教養系を奉仕対象とするように位置づけられる。それらのための研究図書館・学習図書館・教養図書館たるの機能を果たす。

b) 全学図書館行政の中心としての中央図書館機能を果たし、収書・整理センターとなる。学内有線TV・INFORMATなどは、ここでのサービスに繰り込まれる。

c) 図書館・情報学研究施設を付設し、併せて広く図書館専門職員の研修・訓練センターとしての機能をも果たす。

d) 主題別資料センター（古文書部・法規判例

## 九州大学新中央図書館建設の経緯

センター・社会資料センター・地域研究資料センター・統計資料センター・その他)を付設し、レファレンス機能の拡大・分化した形で研究者に貢献する核を形成する。

### 3) 第2総合図書館(自然科学図書館)

a) 自然科学系の研究・教育への奉仕機能を主眼において設置する。しかし第1総合図書館との関連の緊密化は、ゆるがせにできない。

b) 付設した保存図書館が設置されるべきである。それは、不用・稀用の文献・諸資料の有効な処理のためのセンターであって、全学からここに送られた図書館資料につき廃棄あるいは保存の措置をおこなう。したがって保存図書館は、その必要度の高い自然科学系の図書館に付置されるのが適当である。保存図書館は、それが完全に機能するときには、独自のコレクションとクリアリング機能を持つ情報資料センターへと発展することが期待される。

c) ここにおいて学術情報センターが付置される。本学としては、地域的な学術情報センターとしての機能を当然に担うべきであって、SDI サービスなどの展開のため、コンピューターの利用は不可欠であり、CAS、INSPECなどの磁気テープ・サービスが導入されよう。この意味においても、自然科学図書館に付設されねばならない。

### 4) 医学図書館

a) 医学系キャンパスでは、既存の医学分館の機能の拡充強化が必要である。とくにすでに我が国において実施が近づいたMEDLARSのネットワークの中で、九州地区における本学の任務を果たすべきである。

b) 上記の観点からMEDLARS地区センターを包含した医学情報センターが計画され、研究者の要求に応える必要がある。自然科学系に設けられる学術情報センターと緊密な連繫を保ち、また薬剤情報システムとの協力関係も重視されるべきである。

### 5) 総合資料館

#### a) 総合資料館

本学各部局が所蔵する標本資料は、優に280万点を超え、その中には、他には見られない貴重な基本標本を多数含んでいる。その嚴重かつ適正な保管が急務であるばかりでなしに、研究・教育のためにも、それらは、積極的に活用が図られるべきであるし、しかも広く地域社会のためにも公開されねばならない。そのた

めの施設として総合資料館は、本学に設置されるべきものである。

#### b) 九州大学史料室

本学の史料を収集し、整理し、保存し、さらに九州大学年史を編さんするため、「九州大学史料室」が設置されるべきであるが、これは、性質上総合資料館に置くのが適当である。

6) 図書館学科の設置を大学として考慮すべきである。<sup>3)</sup>

以上の構想は、我が国の大学図書館が目指している図書館近代化と学界が要望している学術情報流通体制改善の線とに沿うものであり、九州大学がこれを各部局の将来計画と調整した総合計画の中で具体化するためには、春日原のような立地条件が必要であると結論づけられる筈であったが、春日原移転計画は、1年近い交渉の末、自然環境の復元と公園化に固執する地元自治体の同意が得られぬまま1974会計年度概算要求の時期が切迫し、遂に打ち切られることになった。

しかし、移転計画の打ち切りは、評議会における将来計画審議の打ち切りを意味しないので、図書館側としては、図書館行政についての全学のコンセンサスを得るために、その後の学内情勢の変化を採り入れ、計画の各要素についての具体的データを示し、さらに図書館予算およびマンパワーの問題を分析した将来計画修正案を作成する必要に迫られている。

## おわりに

1974年5月30日に、国・公立学校建物の年間優秀作品に与えられる「施設月報賞」の1973年度授賞式が文部省管理局でおこなわれ、九州大学中央図書館が他の5作品と共に授賞した。これは、新館が学外からの公式かつ専門的な評価を受けた最初であり、計画に関与した1人として喜びを禁じ得ない。授賞理由は、「アプローチの方法に議論があったが、内部機能の充実に優れた点が多いことが認められた、」とされ、機能を優先して考えた我々の意図に合致するものであった。また、アプローチの方法の是非については、これはかなり大胆に新しい試みをした計画上の重点であっただけに、議論があるのはむしろ当然というべきで、我々としては、利用者から好評で、その点についても自信を深めている。

計画推進上の最大の困難は、管理的・行政的問題の処理であったが、この報告でも、それらの経緯を詳述する考えを採っている。

管理的能力・知識の点については、整理技術中心の訓練を受け、1大学・1図書館に勤務経験が固定していることの多い我が国の大学図書館職員の弱点の1つであり、今回のような図書館新築の機会にワーキング・グループという形式での研修効果として、総合的な観点から図書館を考える能力を養うことの意義は認めながらも、事能の進展が極めて急であったため、短期間に計画をまとめることを求められた初期の段階で、筆者は、図書館職員から成るワーキング・グループを作ることをあきらめ、手許で計画の全部にわたりチェックする実戦的な方策を探らざるを得なかった。幸いにして、計画そのものは、遅滞なく進捗したが、図書館職員の新館についての関心は、もう一つ盛り上がらなかった。筆者は、今もなお、この方策がすべてについて良かったとは思っていないが、前述のようなキャリアを持つ図書館職員からワーキング・グループを通じて、偏らない有益な提案を得ることができたかどうかという点についても、甚だ自信がないのである。

この計画の中で、筆者は、資料の性格・形態による利用上の区別はあるが、身分による利用上の差別はないことを主張したつもりである。その後、聞くところによれば、新館は、極めて開放的に運営され、新しい利用規則もまた、入館時に一度だけチェックを受ければ、あとは、館内の何れの利用場所でも教官・学生の別がないように定められた。この点、筆者としても、満足を感じている。

この報告をまとめるに当たって、新館を計画する当初からの協力者であった、九州大学施設部の藤岡敏工管掛長、図書館の本多震一整理課長補佐、本郷忠一会計掛長の諸氏から数回にわたり資料面での協力をいただいた。とくに、本多氏は、筆者の文字通りの耳目となって技術的データの収集・調査に当り、添付の諸表も彼の提供によるものが多い。ここに紹介してこれらの諸氏に謝意を表したい。また、すでに他大学の構成員となった筆者が、このような報告ができたのには、大学施設部などに対し、中村譲図書館事務部長の好意あるお取りなしがあったからであることを付記し、謝意を表したい。

- 1) 文部省管理局教育施設部. 大学図書館施設計画要項. 東京, 1966.
- 2) 九州大学附属図書館. "新図書館建設計画の近況," 図書館情報, vol. 7, 1971. 8-9, p. 45-50.
- 3) 九州大学広報委員会. "将来計画小委員会第1次報告および同報告に対する各部局の意見について," 九大大学広報, 号外 5, 1972. 11. 22, p. 1-40.

#### 参 考 文 献

- 九州大学附属図書館. 九州大学中央図書館新築計画参考資料. 福岡, 1965.  
九州大学附属図書館. 九州大学図書体系マスタープランについて (資料). 福岡, 1967.